

書評

吉田竹也『地上の楽園の観光と宗教の合理化——バリそして沖縄の100年の歴史を振り返る』

■出版地：名古屋 ■出版社：人間社 ■出版年：2020年 ■総頁数：432頁 ■定価：3000円＋税

橋本 和也*

I はじめに

本書は、著者吉田竹也のバリにおける30年間の調査研究の成果を「観光宗教論」という新たな研究領域としてまとめる試みである。著者はこれまでも、バリの宗教を主題にした『バリ宗教と人類学——解釈学的認識の冒険』（2005、風媒社）、そして観光を主題とした『反楽園観光論——バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』（2013、人間社）を出版している。近年日本では、宗教研究の分野からの観光研究として山中弘を中心に若手研究者が『宗教とツーリズム』（2012、世界思想社）や『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』（2020、弘文堂）を出版し、聖地・巡礼・世界遺産などと観光との関わりを、アニメ聖地巡礼やアウシュヴィッツへの旅（ダークツーリズム）なども視野に入れた「宗教ツーリズム」研究として主題化している。著者は叙述にこだわった理論的考察を踏まえてバリの民族誌的記述を行い、「観光宗教論」のオルタナティブを探求したいという（本書：361）。

本書の構成は、序論・問題と方法。第I部・理論的枠組みの検討として、第一章・歴史の叙述と合理化の探求、第二章・合理化しリスク化する現代社会、第三章・島嶼の楽園観光地の構造的特徴。第II部・バリの100年を振り返る、第四章・植民地状況下での楽園観光地化、第五章・未完の企てとしての宗教合理化、第六章・現代バリの観光・宗教・リスク。結論・バリの観光と宗教の関係性、となっており、最後に58頁におよぶ補論「沖縄の100年を振り返る——地上戦の煉獄から観光の楽園へ」が掲載されている。

オランダ植民地政府の干渉とバリ在来モノとがハ

イブリッドに絡みあって「楽園バリ」は構築されていった。西欧の宗教的価値を表象する楽園イメージが、近代の楽園観光という現象を成立させたのである。その楽園を演出する後押しをしたのがバリの宗教儀礼と渾然一体となった芸術・芸能であり、オランダ人行政官・オリエンタリストのまなざしを受けてバリ人は「自ら」の「宗教と芸能」を発見したのであった。植民地体制下で醸成された「楽園バリ」イメージは、大衆観光時代を迎えると全世界に広がった。21世紀には様相をおおきく変容してポストモダンの特徴をあらわし、さらには全世界的なリスク社会化への対応が必要になった。バリは西洋の楽園イメージを表象した「楽園観光地」から、大衆観光時代に世界各地で増殖していったシミュラクルの集積からなる「何ものでもないもののグローバル化」（リッツァ）を実体化した「楽園観光地」へと性格を変えていったのであった。いまや研究者は、20世紀前半の分析枠組みから21世紀の状況に対応可能な分析枠組みを模索しなければならなくなった。本書はその模索を続けてきた著者の痕跡である。

II 各章の概要

1 第I部（第一章、第二章、第三章）

第一章ではギアツとヴェーバーの合理化論を比較する。なぜわれわれは耐え難い苦難を経験するのかといった問題に対し、論理的な知識と情緒的なムードが一体化することによって「覆い隠す」メカニズムをもつというギアツの「文化システムとしての宗教」論は、伝統的宗教をも含む宗教一般の根源が「意味の問

吉田竹也『地上の楽園の観光と宗教の合理化』

* 京都文教大学

題」への対処にあるという論理から成り立っており、彼のバリ宗教合理化論もこの論理に基づいている（本書：76）という。一方、ヴェーバーの「意味問題」は、個別社会においてそれぞれのあり方をもってある時点から気づかれていくアポステリオリな契機と捉えられており、論理整合的であるという。ギアツはヴェーバーのいう意味問題を独自に一般化し（いわば「上手な誤読」をして）、「意味の問題」を宗教一般の成立の根源にあるアプリオリなカテゴリーとして設定し再定式化した（本書：76-77）。ヴェーバーは社会的・文化的領域の合理化は並行的には進まず、速度や方向性がバラバラであると考えており、ギアツよりもヴェーバーの合理化論の方に理論的なポテンシャルティがあると指摘する。

第二章では、ヴェーバーもギアツも論及していない論点へと展開し、合理化論とリスク社会論との接合の理論的可能性を探る（本書：94）。ヴェーバーの宗教合理化論の可能性の中心は、合理化の非合理性というパラドクスとその脱パラドクス化という点にある。しかしヴェーバーは植民地支配の非合理性などを視野におさめておらず、合理化の転移という外発的発展論の枠組みを欠いている。合理化と非合理化との間の関係メカニズムを、とくに再帰的近代におけるリスク化・監視社会化・生権力の強化・生活世界の植民地化などをめぐって総合的に検討する必要性を著者は強調する（本書：289-290）。

第三章では、現代の楽園観光地化と植民地化との同型性を取り上げる。楽園観光は西欧中心主義的な価値・制度の転移を特徴とし、バリは植民地支配の下で観光地化していった。楽園観光の生命線は差別化よりも同質の楽園イメージの体現にあり、複製技術革命後の各種メディアと不可分の関係にある（本書：133-134）。類似する楽園観光地ではどこが発展し、衰退するかは偶然的であり、不確定性という構造的リスクを抱えている（本書：136）という。

2 第II部（第四章、第五章、第六章）

第四章では、オランダ植民地政府の「バリのバリ化政策」は、バリ社会の根幹が土着の民衆が作り上げている「儀礼中心主義」的な宗教共同体にあるとの理解のうえで、オランダ側がバリの伝統文化と見なしたものをバリ人側に示し強要するというある種の倒錯をはらんでいたという。旧王族・領主層は宗教文化の領域を互いの威信をかけて戦う象徴政治の舞台とした（本

書：165）。ギアツが劇場国家論で論じた状況がここに出現したのであり、19世紀の国家に当てはまるかどうかは微妙であると著者は批判する。植民地下の観光化の時代に、多くのバリ人は貧困の中にあり手頃なビジネスとして「芸術」の創作と提供に取り組み、バリの舞踊・音楽が宗教儀礼から脱脈絡化され、観光者向けのショーが発展した（本書：171）。ケチャなどが観光者向けのショーとなる過程で、シュピースやベロらは「伝統的なバリ文化」を調査・探求しつつ、同時にそれを創り出してもいたのであった（本書：175）。

第五章では、1930年代後半からバリ宗教の合理化が進み、1950年バリ地方政府評議会はインドネシア中央政府に対してバリ宗教の公認を求めたが、正式名称や哲学教義体系などがあいまいであったため認められなかった経緯が説明される。その後体裁を整えるためバリヒンドゥーの唯一神を定め、種々の儀礼を整え、1日3回の礼拝（トリサンディオ）を教徒の義務とした（本書：194-195）。1958年に「バリヒンドゥー教」が認知され、その後拡大の局面を迎え、諸地域・諸民族集団に浸透していった。1998年の「リフォルマシ」の時代に言論・信教の自由化がはじまったのを機会に、2001年バリ州パリサドは「全体会議」から分岐し、伝統主義的方向をめざした（本書：208-209）。バリ社会では儀礼中心主義・司祭中心主義的性格が温存され、バリアン（占い師）の呪術的な活動も衰えず、合理化は徹底されなかった（本書：217-218）。バリのヒンドゥーの合理化の取り組みは、もつれ合った綾を抱えた未完の企てであり、流体的・液状的なものでありつづけているのである（本書：219）という。

第六章は、観光と宗教の相克と妥協についての記述である。1970年に観光部局は芸術文化の合理化をすすめ、観光に用いてよい文化の部分と、観光に供出してはならない「聖なる部分」を区別したが、観光者たちが消費したのはバリの宗教文化を彩る要素であった（本書：227-231）。1990年代以降のバリは、芸術に関心のない顧客をも吸引するシミュラークルの集積体からなる楽園観光地となったが、伝統的な宗教文化も強化され「ゲンシ」（威信・体面・見栄、神秘的な世界へ橋渡しする力・魔術）が追求された（本書：236）。ギアツは地位の高い人の闘鶏を取り上げ「深い遊び」として解釈したが、著者はその対極の庶民がおこなう「浅い遊び」の方こそ、バリの闘鶏を代表するものであるという（本書：240-241）。超自然的存在への畏怖

という呪術的な契機もバリ人を華美（ラメ）な儀礼へと向かわせる。ラメとは、複雑でにぎやか、華やか、満ち溢れたといった意味で、儀礼のラメ化は観光と合致したのである（本書：255）。

観光開発によって宗教が負の影響を受けるときには敏感な反応があった。1990年から3回、ブサキ寺院の世界遺産記載に向けた動きがあったが、申請は見送られた。その一方で、バリ島中部の文化景観や、神聖な舞踊・世俗の舞踊・その中間形態からなる9つのバリ舞踊が世界遺産に記載され、観光資源化した。1993年のBNR（Bali Nirwana Resort）の大型複合リゾート開発やGWK（Garuda Wisnu Kencana）の建造には賛否両論があった。宗教への侵犯には抵抗がみられても、島民は開発を受容せざるをえない中で「民俗的な対峙」（橋本 2021）を試みている。それに関してはコメントで述べる。

3 結論部

本書の「観光宗教論」の主題となる観光の合理化と宗教の合理化の複合性（もつれ具合）、そしてリスク化が同時に進行する現状についてのまとめとなる。

- ① 「バリ宗教の合理化とリスク」：宗教合理化の過程は複合的で、合理化概念も多義的である。儀礼の肥大化・ラメ化・準備期間短縮・組織的運営と集約化は、呪術の園からの解放というよりは、再呪術化あるいは呪術の中へのインヴォリューションとなった。現代のヒンドゥーの合理化・改革はリスクを抱え、未完のプロジェクトにとどまっている。ギアツが主題化したバリ宗教についての楽観的な予想（世界宗教の成立に匹敵する新たな事態）よりも深刻な方向に向かうというのが著者の見解である。
- ② 「バリ観光の合理化とリスク」：楽園観光地バリはそれ自体が何重もの構造的脆弱性（リスク）を抱えていた（本書：294-295）。宗教合理化の過程で出現した倫理や規範ではなく、伝統的な儀礼活動という呪術的实践がバリでは観光と結びついて資本主義的経済の展開を促進したのである。バリ人の宗教活動ではゲンシの誇示やラメの実現が望まれ、バリの観光と宗教との互恵的な関係を支えた。バリ宗教の合理化が観光地化や伝統文化の再発見の過程と並行・交差していたという点が、他の楽園観光地にはみられない独特の特徴であった（本書：297）という。
- ③ 「今後の方向性」：観光と宗教の正と負の両面を併せもった合理化／リスク化が互いに連関し合う再帰

的な関係性こそ、バリ社会の近代化における中核的なメカニズムであった。観光の合理化と宗教の合理化との相互作用の関係が、今後も続くという保証はない（本書：300）。観光が宗教を飲み込みつつ肥大化する中で、観光と宗教それぞれにリスクの増大が認められる現状が続けば、両者の間に再び蜜月関係が訪れる可能性は低いという。

- ④ 「楽園の日本人とバリ観光のリスクの高まり」：ウブドは宗教を売り物とする楽園観光地から、シミュラクルのイメージを売り物とする楽園観光地へ転換した。1990年代に日本から楽園での暮らしを求めて移住してきた人々は、「反ビジネスの志向」の商売をし、あくせくしない生き方を学んだと語っていた。1990年代は好調であったが、2002年のテロ事件や2006年の大地震などでバリの安全神話が瓦解した。さらにシミュラクルに満ちた楽園観光地への転換で観光は高リスク化をむかえた（本書：272-275）。移住というリスク回避の選択は、予想外の出来事の連鎖によって、別のリスクとなって跳ね返ってきたのである。

リスク社会の中にある現代人は、生活圏のかなたに存在する楽園に癒しを求めて訪れる。心身の健全さの維持やリフレッシュのための余暇活動としての観光には、新規の観光地や新規の観光施設こそ、魅力的なものに映る。いまま世界の各地では、新たな楽園観光地が開発され、既存の観光地も自己との差別化のために再開発をすすめているのである（本書：285）。

III コメント

1 本書を書くこと

著者ははじめにヴェーバーの歴史学的記述・分析と解釈学的叙述、そして理解社会学の定式化について言及する。バリの観光宗教論を標榜する本書においてなぜ哲学書のようにヴェーバーの『宗教社会学論集』の解説・批判が続くのかと途惑っていたが、本書58頁にいたって評者なりの合点がいった。人類学では1980年代後半から「民族誌を書く」ことに関する方法論と、人類学のあり方そのものについて根底からの問い直しがはじまった。人類学者は「未開の」「無文字の」「歴史のない」人々になり代わって当然のごとく語ることはできないと、『文化を書く』の序論でジェイムズ・クリフォード（1996: 17）は指摘する。本著者も『文化を書く』以後の研究者として、バリの

観光と宗教に関する民族誌を書くことについての立場を表明したのだと理解した。

ギアツは「厚い記述」という概念に圧縮して表現しうる記述志向の理念と、複雑な事象の特徴を縮約して表現する道具としての理念型を効果的に使用した。「深い遊び」「劇場国家」「内在的改宗」「厚い記述」などの独創的な理念型の案出に、ギアツのヴェーバーアンたるところがうかがえるという。ヴェーバーの「文化科学は理念型による把握と、個別の事象の固有なあり方そのものをただ把握するということに、意義を見出す学問」であるという考えを、ギアツは「厚い記述」への志向の基点に据えた（本書：58-59）。ヴェーバーの解釈学的認識への構え（個性記述的志向）が人類学的な関心と重なり、先の『文化を書く』が提出した問題への回答ともなるのだと、評者は理解した。ヴェーバーから人類学が受け継いだのは、類型把握よりも、事実それ自体の叙述と理解を最重要視し、個性記述的な民族誌という方法スタイルであった（本書：64-65）。本書の「観光宗教論」が目指したものは、ヴェーバーが目指しながら十分には果たし得なかった「厚い記述」によって、バリ以外では「取るに足らない些細な意義しかもっていない」かもしれないが、「対象それ自体のために」観察し、その社会において対象のもつ固有性・価値を諸関係のなかで理解することであった。

2 ミッシェル・ピカール論文との比較

評者は『観光人類学の戦略』（1999年）で、ピカールの「文化観光、国家建設と地域文化——バリのアイデンティティ形成」（Picard 1997: 181-214）を参考にした。ピカールは「バリ文化」を「文化的人工物」として扱い、バリ文化に根源的だといわれる宗教、伝統的慣行、芸術／文化が、オランダによる植民地化、インドネシア化、そして観光化への対応の中で意味論的借用と概念的組み直しの過程の結果として形成されたと（橋本 1999: 136-137）、バリ社会の変容を分かりやすいストーリーとして提示した。オランダ植民地政府がヒンドゥーをバリ社会の基盤とし「新慣行」を設定した背景には、バリのイスラーム化を防ぐ意図があった。バリ人は「新慣行」とまどい、オリエンタリストから「いかにしたら真正なバリ人であり続けられるのか」を教えられた。これが「バリのバリ化」政策であった（Picard 1997: 186）。1928年に観光者用に提示されたバリ・ダンスが「文化観光」のはじめであ

り、外国人観衆のため表現的な出来事をダイナミックで直線的に上演する「新スタイル」のダンスが考案されると、バリ全体に広がった（Picard 1997: 191）。1950年代宗教省はバリ宗教を「部族的」なものとして「アダット（慣行）」の領域に入れ、バリ人を無宗教に分類した。バリ宗教の整備により、1958年バリの信仰は「アガマ（宗教）」と認定された。1965年スハルト政権は「新秩序」体制を発足した。民族文化は「文化芸術」といわれ、国家による開発政策は宗教の「脱文化化」、芸術の儀礼的機能の衰退を招いたとピカールは批判する。共産主義者の虐殺が行われると、多くのジャワ人は「無宗教＝共産主義者」とのレッテルを貼られることに脅威を感じ、ヒンドゥー教徒になった。バリとジャワのヒンドゥーに他の7つのマイノリティ・グループが加わった結果、バリ人は自分たちが築き上げてきた「ヒンドゥー会議」で少数派になってしまった（Picard 1997: 197-200, 橋本 1999: 140-142）。1993年に計画された「ガルダ・ヴィシュヌ・クンチャナ（GWK）」は125メートルの高さを持つ「世界でもっとも大きくて高い彫像」で、完成すれば国を代表する「文化的遺産」となるといわれたが、学生や活動家は「観光者は自由の女神より高い彫刻物を見に来るのではなく、『真正な』バリの伝統的な生活を見に来るのだ」と反対した（Picard 1997: 203）。しかし評者は、大衆観光の特徴を「よく知られたものを確認する」と捉えており、それが真正かどうかの議論とは関係なく、GWKが「よく知られたもの」になれば観光者はまなざしを向けると批判した（橋本 1999: 144-148）。

著者は、ここで紹介したピカールのような分かりやすいストーリー展開とは一線を画すことを目指したと考えられる。ヴェーバーを引き合いに出し、さまざまな社会的・文化的領域の合理化は決して並行的には進まず、速度や方向性においてバラバラで、進んだり進まなかったりすると（本書：77）、一筋縄ではいかないバリの状況を強調する。楽園観光地における観光の合理化（と非合理化/リスク化）と宗教の合理化（と非合理化/リスク化）との関係性に注目し、バリの人々は呪術的な合理化と知性主義的な合理化の二面の合理化の過程の中に生きっていると理解すべきであり、ギアツとヴェーバーの議論枠組みを超えて、この二つの合理化の絡み合いや表裏一体性に注目することが重要だという（本書：289）。本書の意図として著者は「安易な理解」を拒否することに腐心し、合理化だけ

でなく非合理化とリスク化の側面を記述に加えて、「反理解」の方針を貫こうとしているといえよう。これは、ベック（2014）のいう近代化がもたらした意図せざる帰結・副作用（リスク）とどのように自己対決していくかという「再帰的近代」（「第二の近代」）の課題を、著者なりに明らかにしていこうという姿勢と評価できよう。

3 いまなぜ「樂園観光」「反樂園観光」なのか

山中速人の『イメージの樂園』（1992）出版後30年近くたって本書が出版される意味はなんであろうか。まさに2020年のコロナ禍のなかで「擬似体験」としてのヴァーチャル観光が取り沙汰され、「移動論」のなかに観光が回収され、観光の危機が懸念されるなかで、多くの「リスクに対峙」するバリの観光のあり方こそ語られる価値があるといえよう。観光地支配のメカニズムは、植民地時代よりもむしろ今日のポストコロニアルの大衆観光時代において、いっそう強度を増している（本書：143）。小さな島嶼社会が「脱樂園観光地化」することは非常に困難で、それが可能なのは産業論的に一定のポテンシャルティがあり、さまざまな観光形態を育成し観光以外の産業をもつ複合観光地だけである（本書：134）。「脱樂園観光地」を目指すには、セルトーのいうようにマイノリティや弱い立場の人々に注意を払いつつ、個々の「樂園観光地」の固有の特徴を「歩く者」の立場からみることが適的な手法となるという（本書：139）。一望を俯瞰する立場（見る者）から「樂園観光」の一般的特徴を明らかにするのではなく、ボトムアップの立場（歩く者）から探し出す反観光論的な「歩く者」のささやかな抵抗をこめた生きる術を、すなわち評者のいう「地域のモノ」がなすべき「民俗的対峙方法（戦術）」を見つけ出せるかもしれない。

4 バリ島民による「民俗的対峙方法（戦術）」

評者は、コロナ禍が進行し世界における「移動・観光の再考」が求められているとき、「他者」を迎えることに対する地域の「民俗的対峙方法（戦術）」（橋本2021）について考えている。想像もつかぬような「大きな」霊的存在や災い（荒ぶる神・マレピト神、自然災害・疫病）や「他者」に対して「畏れ」を抱きつつも臆することなく「対峙」して迎え、歓待（儀礼）をもって接遇し、そして送り出す「民俗的対峙方法（戦術）」のあり方を考えることが必要だと考えている。

観光開発に対するバリ島民の「対峙方法（戦術）」といえる事例がある。

聖地サヌールにバリビーチホテルが完成し、最初のリゾート観光地となった。（ハウザー＝ショウプリン著の）ある事例を著者が紹介している。サヌール海岸は地域の人々が火葬後の遺骨を海に流す場所で伝統的に不浄の方位とされ神聖かつ忌避される場所であったが、観光開発の文脈においては価値があった。神聖な寺院の土地も観光開発に供され、官主導の観光施設が建設された（本書：259-260）。敷地内には埋葬地と死霊を祀る寺院があったが、慎重な儀礼が施されて移転され、完成したホテルの中に複数の社をもつ「ホテル寺院」が建設された。儀礼の手続きが不十分だったからか、建設の過程でいくつもの事故や事件が発生し、宿泊客からは霊などの目撃情報も寄せられた。1971年拡張時には、寺院司祭が憑依して寺院の移転を（神として）非難した。ホテル側は、客室をホテル寺院の神のためにリザーブし、慰撫するための儀礼やホテル寺院の改修を何度もおこなった。1993年にはホテルが全焼したが、神々の領域だけは被害がなかったという（本書：260）。

ハウザー＝ショウプリンは、観光開発と不可視の領域の侵犯・破壊に対して反撃をした神々との間の相克と捉えた。その後のホテル再建、土地のさらなる拡張は、神聖なるものに対する冒涇の勝利と解釈した（本書：260）。著者は、これを神々の観光開発に対する抵抗や、冒涇の神聖なるモノに対する勝利と捉えるよりも、むしろ神々の反撃が沈静化し抗争が妥協に向かった例として理解する（本書：260-261）。この事例では神々の抵抗はあったが、拒否による開発撤回までにはいたらなかった。神を慰撫しつつ開発は着々と進められたのであった。通常は、神々の意志に丁寧に応答して宗教施設などの改修をおこない、神々を慰撫しつつ開発が進行するという（本書：263）。「地域のモノ」（霊的存在や人間）が「そとのモノ」（他者、開発、経済的利益、災害、疫病など）と対峙・交渉しながら、生活世界を守る姿がここには見られる。

5 「上手な誤読」について

ギアツは「文化システムとしての宗教」で、経験をいかに解釈するかという「意味の問題」が宗教における重要な問題であるという。例としてローデシアの老婆の事例をあげ、両親と身内をすべて超自然的存在（*Leza*）によって殺された訳を知ろうと地の果てまで

探しにいき、どうして自分を苦しめるのか問いただそうとした。しかし彼女は地の果ても、神も見つけられなかった。その時出会った人々から「あなたの苦しみは分かった。でも、ほかの人とどこが違うのか」と問われたが、困惑と失意のなかで死んでいった。ギアツは、宗教の問題はいかに苦しみを避けるかではなく、どのように苦しむか、どのように苦しみを耐えられるものにするかにあるという (Geerts 1977 : 18-19)。評者にはこの説明が「腑に落ちた」わけであるが、著者によればこれはギアツによるヴェーバーの「意味の問題」についての誤読であるということになる。ギアツの「劇場国家論」「厚い記述」「意味の問題」などはいまや人類学の古典的概念ともなっているが、著者は、ギアツはヴェーバーを読み込んでいないし、正確な引用もしていないという。しかし「上手な誤読」はむしろ推奨されるべきで、ヒントとして生かし独自の概念として鍛え上げる努力こそが評価されるべきである。作品は、アレゴリー的な読みを避けられない。同様に、理論に関しても「上手な誤読」はむしろ推奨されるべきものであると評者は考えている。

6 補論について

著者は、沖縄に関して、観光の合理化や、宗教生活の一部を構成する慰霊の合理化については記述できるが、観光の合理化と宗教の合理化の密接な相互関係を確認することはできない。沖縄の人々の宗教生活は、観光者のまなざしからは離れたところで営まれており、沖縄の宗教と観光の関係に関する検討は、バリの場合とは異なる議論とならざるを得ないという。しかしながらこのような補論は、一冊の本としては奇異な印象を受ける。バリと沖縄、または他の事例を同じ分析枠で扱えるようになってはじめて一冊の本となる。次の機会に期待したいと思う。

参考文献

クリフォード、ジェイムズ

- 1996 「序論——部分的真実」『文化を書く』ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス (編)、春日直樹、足羽與志子、橋本和也、多和田裕司、西川麦子、和邇悦子 (訳)、pp. 1-50、紀伊國屋書店。

橋本 和也

- 1999 『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方』世界思想社。
2021 「コロナ禍以後の観光——『一般生活者・観光者』の民俗的視点から」『立命館大学人文科学研究所紀要』No. 125、pp. 125-150。

ベック、ウルリッヒ

- 2014 『世界リスク社会』(叢書・ユニベルシタス1004) 山本啓 (訳)、法政大学出版局。

山中 速人

- 1992 『イメージの〈楽園〉——観光ハワイの文化史』(ちくまライブラリー74) 筑摩書房。

山中 弘編

- 2012 『宗教とツーリズム——聖なるものの変容と持続』世界思想社。
2020 『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂。

吉田 竹也

- 2005 『バリ宗教と人類学——解釈学的認識の冒険』風媒社。
2013 『反楽園観光論——バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』(樹林舎叢書) 人間社。

Geertz, Clifford

- 1977 Religion as a Cultural System. In *Anthropological Approaches to the Study of Religion*. Michael Banton (ed.), pp. 1-46. Great Britain: Tavistock Publications.

Picard, Michel

- 1997 Cultural Tourism, Nation-Building, and Regional Culture: The Making of a Balinese Identity. In *Tourism, Ethnicity, and the State in Asian and Pacific Societies*. Michel Picard & Robert E. Wood (eds.), pp. 181-214. Honolulu: University of Hawai'i Press.